白金薄

10 月号

平成27年10月発行　　第56号

白金葭定例句会案内

十一月二十日(金) 12:00～15:00 ア第四　兼題:酉の市、大根

十二月十八日(金) 12:00～15:00 ア和室　兼題:冬夕焼、すき焼

一月十五日(金) 12:00～15:00 ア第三　兼題:新年一般、17:00～19:00

新年会(於　備前)

酉の市、大根の参考句（十一月二十日分）

三の酉おかめの笑みで四十路で　古沢太穂

東京ににんげん多く酉の市　山崎聰

酉年の酉の街ゆきはぐれけり　斉藤冨美子

朝風に金箔飛ばす熊手かな　野村喜舟

たかだかとあはれは三の酉の月　久保田万太郎

寄り道も我が道なりし酉の市　長谷川栄子

大熊手小熊手をして万の素手　成田千空

困るほど大根もらひ困りをり　谷美都子

大根が欠かせぬ二人暮らしです　小高沙羅

大根を抜くやすとんと日暮れたり　山田征司

大根馬かなしき前歯見せにけり　川端茅舎

洗へば大根いよいよ白し　種田山頭火

越前の辛み大根添へてあり　柏田浪雅

嫁威しの寺がすぐそこ掛大根　亀田蒼石

月例句会報（'15／10／16　9名欠1）（秋思、落鮎）

帰るさの犬が跳びつく萩こぼる　飯田孝三

大満月よりも大円観覧車

はたと二駅のり過ごしたる秋思

落鮎の一筋徹る銀の錆

折鶴の嘴尖る秋思かな

粍に足りぬ羽虫秋思のはて飛べり　増田陽一

雀蜂の貌巨きけれ秋過ぎつつ

出ることなき老人ホーム秋澄めり

落つる鮎遡る鮭行きちがふ

落鮎の時に逆らふことのあり

落鮎やロマンスカーが橋渡る　光成高志

落鮎の川に釣人山に雲

心耳に聴く五百羅漢の秋思かな
青春はいつも秋思の顔となり
名月や大魚の雲を透かしつつ

光　みち

十月の富士足柄の人と見る
ひもすがら風吹きすさび鮎落つる
擦れ違ふ時ひと鳴きの秋の蜂
針仕事ひとりの時間秋思かな
運動会敬老席は眠くなる

吉羽多美子

穐田の畦に休みて郵便夫
石の庭眺めてゐたる秋意かな
理髪屋の廻る看板雁渡る
鮎落ちて夕日とどまる川面かな
新米や故郷もたぬ者同志

倉田紀子

茹菱を紙袋で売る昭和かな
鰓さされ青笹しなふ子持鮎
爽やかやインクを満たすモンブラン
山手線しじまのありて秋茜
新米に手首埋むる夜の厨

松村幸一

毒茸に美学を問はむよしもなし
鮎落としつぐ山川のこだまかな
研して男滝女滝の秋思かな
しほさゐが秋思となりて寝つかれず
銀漢の落ちむばかりの渚かな

武者昭七

砂山に影を落として秋の蝶
萩咲くや忍ぶ恋にも似たりけり
落鮎の簀子を叩く尾鰭かな
秋思にも色はありけり茜雲
伊良湖崎流されびとに鳥渡る

浅野正美

独り居の語るすべなき秋思かな
旅心落鮎の頃定まるや
瀬音聞き落鮎食す山の宿
秋思濃し車窓一面富士雄姿
バトンつなぎ声援湧くよ運動会

落鮎は川の神様銀河色
子規忌来る今年の彼岸はさんざんで
かなかなや梲も納屋も人消えて
茎一本彼岸見まわす曼珠沙華
銀河までトロッコの出る河童沼

青木啓泰

選句結果（数字は入選数　左添書きは添削句）

5　落鮎は川の神様銀河色　啓泰
5　出ることなき老人ホーム秋澄めり　陽一
3　砂山に影を落として秋の蝶　昭七
3　粍に足りぬ羽虫秋思のはて飛べり　陽一
3　鰓さされ青笹しなふ子持鮎　紀子
3　擦れ違ふ時ひと鳴きの秋の蜂　みち

3　折鶴の嘴尖る秋思かな　孝三
2　しほさゐが秋思となりて寝つかれず　幸一
2　理髪屋の廻る看板雁渡る　多美子
2　落鮎の一筋徹る銀の錆　孝三
2　落つる鮎遡る鮭行きちがふ　陽一
2　秋思濃し車窓一面富士雄姿　正美
2　新米や故郷もたぬ者同志　多美子
2　新米に手首埋むる夜の厨　紀子
2　はたと二駅のり過ごしたる秋思　孝三
2　大満月よりも大円観覧車　〃
2　石の庭眺めてゐたる秋意かな　多美子
2　穐田の畦に休みて郵便夫　〃
1　茹菱を紙袋で売る昭和かな　紀子
1　毒茸に美学を問はむよしもなし　幸一
1　鮎落としつぐ山川のこだまかな　〃
1　青春はいつも秋思の顔となり　高志
1　銀河までトロッコの出る河童沼　啓泰
1　旅心落鮎の頃定まるや　正美
1　雀蜂の貌巨きけれ秋過ぎつつ　陽一
1　研して男滝女滝の秋思かな　幸一
1　落鮎の簀子を叩く尾鰭かな　昭七
1　落鮎の川に釣人山に雲　高志
1　伊良湖崎流されびとに鳥渡る　昭七

1　かなかなや梲も納屋も人消えて　啓泰
　　かなかなや梲の納屋も人消えて
1　心耳に聴く五百羅漢の秋思かな　高志
1　秋思にも色はありけり茜雲　昭七
1　針仕事ひとりの時間秋思かな　みち
1　爽やかやインクを満たすモンブラン　紀子
1　山手線しじまのありて秋茜　〃
　　子規忌来る今年の彼岸はさんざんで
　　落鮎やロマンスカーが橋渡る　啓泰
　　鮎落ちて夕日とどまる川面かな　高志
　　運動会敬老席は眠くなる　多美子
　　茎一本彼岸見まわす曼珠沙華　みち
　　バトンつなぎ声援湧くよ運動会　啓泰
　　銀漢の落ちむばかりの渚かな　正美
　　落鮎の時に逆らふことのあり　幸一
　　瀬音聞き落鮎食す山の宿　陽一
　　ひもすがら風吹きすさび鮎落つる　正美
　　萩咲くや忍ぶ恋にも似たりけり　みち
　　独り居の語るすべなき秋思かな　昭七
　　帰るさの犬が跳びつく萩こぼる　正美
　　十月の富士足柄の人と見る　孝三
　　名月や大魚の雲を透かしつつ　みち
　　　　　　　　　　　　　　　　高志

一句鑑賞　　倉田紀子

心耳に聴く五百羅漢の秋思かな　　高志

十月十七日の朝日新聞の天声人語を見ると、前日の句会で私がじんじと読めず恥をかいた言葉が出ていた。心を澄まして聞こえないものを聞きとるという美しい日本語だと知った。川越大師喜多院は日本三大羅漢のひとつということもあり、五百体以上の羅漢さんが並んでいる。笑ひ、怒り、嘆き、楽器を奏でる羅漢さんもいる。酒さえ飲んでいるのだ。若い頃、訪れた時は楽しくざざめき合っているだけだと思った。しかし、これは仮の姿。世を説き人の道を私達に問うているのだ。作者は一段高いところで感じとり一句になったのだと思う。秋の静けさ、淋しさ、透明感が感じられる。

私の属しているコーラスグループの指導者は詩の持つ言葉の意味や譜面に書かれていないものを感じて音で表現することを要求する。舟越保武氏のエッセイの中には「白いスケッチブックをじっと見ていると、その奥にあるものが見えてくる」（表現が違うかもしれません）という一節があり印象的だった。この一句に出合い心耳という言葉の意味を改めて考えさせられました。ありがとうございました。

一句鑑賞

光成高志

粍に足りぬ羽虫秋思のはて飛べり　陽一

一ミリにも足りぬ羽虫が秋の物思いの果てを飛んだという句である。「もののあはれは秋こそまされ」と言うけれど、秋思に耽ってばかりいられない。現実の人生を生きて行かねばならない。はたとそう思っていた瞬間目にも見がたい小さい羽虫が飛んだではないか、「飛んだ飛んだ羽虫が」と言わんばかりの作者の心の動きが見えてくる。「秋思のはて」が人間のあはれと羽虫へのエールとの合体した処なのである。

落鮎の簀子を叩く尾鰭かな　昭七

簗に鮎がのりあげて簀子を叩く尾鰭に焦点を当てゝ、しっかりと鮎が描写されており、落鮎のあはれが余情として立ち上がってくる。「下り簗魚跳ね踊る床の上」（石坂晴夫　山尾かづひろさんのブログより）と言う句は二重季語を避けて、かかった鮎や山女魚（やまめ）を魚と一般名にしてあるが、踊るは過剰表現たるを免れない。掲句の「簀子を叩く尾鰭」を「かな」の切字で感動を伝える構成は正統俳句になっていると思います。

山手線しじまのありて秋茜　紀子

山手線はご存知東京都区内をぐるり廻って走る電車。大阪にもぐるり廻る電車があるが、あちらは環状線と呼んで味気ない。繁華街を走るいつも大勢の乗客を運ぶ山手線に静寂（しじま）があるだろうか？と疑問を持つ向きもあろうかと思うが、これがあるのである。車外に赤蜻蛉こと秋茜が見えた、あるいは車内に入ってきた山手線に静寂な一刻があるのに気付いた作者の視線と静かな驚きが見える。

一句鑑賞

武者昭七

出ることなき老人ホーム秋澄めり　陽一

おそらくそこで生涯を終えることになるであろう老人ホーム。いま、秋の澄んだ陽光がそれを包んでいる。それは出ることがないことを自覚した入居者の寂しくも澄明な心境であり、見守るものの心境でもあろう。「秋澄めり」の結句に人の世の寂寥と静かさがにじむ。

粍に足りぬ羽虫秋思のはて飛べり　同

ミリに足りぬ羽虫の正体が何であるかは虫に詳しい作者もご存知ないという。「秋思のはて」を飛ぶのは虫であり、作者である。両者は「秋思のはて」という極限で一つになっているのだ。ちいさくはかない虫も亦一人前に「秋の思い」を抱えているとみる作者はやさしい。

しほさゐが秋思となりて寝つかれず　幸一

若い一時期鎌倉の油比ケ浜の近くに下宿したことがある。寝ていると枕元にかすかに寄せてくる音があった。しばらくしてそれが「潮騒」とよばれるものであること

が知れた。ぼくのなかで潮騒と青春とは分ちがたく結びついていることを思い出させてくれた句である。

心耳に聴く五百羅漢の秋思かな　　高志

「心耳」はこころの耳で聞くこと。こころ澄まして聞き入った時にだけ聞こえてくるかすかだけれど妙なる声だ。普段は陽気に笑いさざめいていることの多い羅漢さんたちも秋には時にものを思うのである。作者はそれに耳を澄ます。秋の寂しさと静けさ。

はたと二駅のり過ごしたる秋思　　孝三

秋思に沈んでいるうちに二駅も乗り過ごしてしまった。冒頭に据えた「はたと」にそれに気づいてあわてるさまが如実。「乗り越したのは秋思のせいよ」と怒りをぶつけているのが結句。意外なところに仕掛けがあるのが孝三さんの句である。そこがまた面白い。

落鮎やロマンスカーが橋渡る　　高志

橋の下を河口に向って急ぐ鮎。その上を駆け抜けるロマンスカー。上も下も忙しい。作者の目も忙しい。取り合せが皮肉なところが俳諧か。

一句鑑賞　　飯田孝三

十月の富士足柄の人と見る　　みち

十月は秋晴れ。収穫、里祭、行楽の時、天高く馬肥ゆるとは、この頃をいうのだろう。固有地名を詠みこむのは難しい、が、二処ふたところもとり込んでこなれる。古く歌枕「足柄」が働く、高原の気を漲らせ、四囲を見遥かす。「富士」は、とうに個を抜け、「十月の富士」一体、凛々錚々、秋の精神スピリットの象徴として在り、終、われと～の「人」の影を点じてぬかりない。“龍の目玉”である。一幅の富嶽高秋図を実まこと、目の当りにするのである。

砂山に影を落として秋の蝶　　昭七

～影を「落として」が見事、いわば句の全て。目の前に砂山がひらけ、砂の地面を静かな時が流れ、地表近くを舞う蝶の影を写す。砂山の向こうに真青な空が見え、爽風が潮騒を運んでくる。蝶は紛れなき「秋」の蝶である。蝶も春やまして夏の蝶ではありえない。セガンティーニの絵を思わせる風景だ。傍目、あだな御託を並べては、可惜あたら、砂山の空気を汚すだろう。確かに、俳句は一字一韻ときに一句に懸かる。

粍に足りぬ羽虫秋思のはて飛べり　　陽一

秋は虫、夜は電灯の明りを慕って、ちょいちょいやってくる、随分小っちゃいのもいる、粍にも足りない。暫くぢっとしていたが、急に飛び去る。思わずはっとする。見分けられないくらい細かな翅をもっているのだ。「秋思」は、羽虫に注ぐ視線に宿す思いであり、飛ぶ暇いとまの羽虫の心でもある。足「り」ぬが臍、～の「はて」と

の呼応絶妙。もし、足「ら」ぬだったら、「はて」はぼやける、秋思未然、調べもだらける。別に「出ることのなき老人ホーム秋澄めり」、秋「澄めり」に万感。

落鮎は川の神様銀河色　　**啓泰**

落鮎の鱗に銀河を見る。命終を迎える清流の魚身に、遥か天上の銀河がきらめくのだ。川の「神様」とはしたり、脱帽、柏手（かしわで）。「落鮎」は天然の神秘の化身なのである。「銀河色」の磐石の座りは神様の尊厳そのもの。日頃、軽妙洒脱に世上を吟じ、時に、粛然、創造の神の前に襟を正す、また楽しからずや。

穐田の畦に休みて郵便夫　　**多美子**

昭和も終戦頃までは、いやその後もか、都市を離れると、あちこちで目にした風景である。ご免、郵便屋さんも風物のひとつ、いや溶け込んでいるのだ。昭和一桁には懐かしい原郷風景とも見え、小春の日のさす穐田を白鷺がおもむろに歩をはこび、鳥が時折電線を離れる。休み「て」の軽い息つぎがあたたかい。別に「理髪屋の廻る看板雁渡る」は、さえざえと秋気が漲る。結は、むしろ「雁渡し」か、「廻る看板」の印象がより深まる。

新米に手首埋むる夜の厨　　**紀子**

季題「新米」の例句は、獲り入れ、荷出し、神饌を祝ぎ歓ぶ。それを炊ぎ、いただく愉みを愛でるのは稀、えてして伝統の趣向をなぞる。ところで掲句は、（炊きあげの新米がよび覚ます五感の愉悦をふまえつつ）厨に炊ぐ隙（いとま）の心の襞に触れる。「手首埋むる」が艶を秘め、「埋む」は「積る」の対、炊きあげた、新米の馥郁の気に包まれた日々を思うのだろうか、目は「手首」に注がれ、「夜」の厨の情が身に染みる。

研して男滝女滝の秋思かな　　**幸一**

紅葉の奥山に鹿の鳴声ならぬ、夫婦の滝の響かいを聞くのである。「研して」が手練、宙を取り込み、晴朗の気を漲らせる。古歌は夕べの情を嘆ずるが、掲句は、西洋の印象派絵画に通い、澄みわたる真昼の景色を目に見せる。「秋思」は身につまされ過ぎぬのがいいようだ。別の「しほさゐが秋思となりて寝つかれず」には、誰も身に覚えがあるだろう。「秋思となりて」が発見、ただ「て」が抜けきらない嫌い。

旅心落鮎の頃定まるや　　**正美**

四季それぞれに旅の思いはあるが、やはりしみじみ身に染みるのは秋だ。「落鮎の頃」が銀燻しの魚身に秋を語らせたのがいい、また「頃」のやさしさも、タビゴコロ～ノコロ～。上中下、各置き換えられるが、掲句の順がいいと思う、「定まるや」の余情をかいたい。離れて住むお孫さんの運動会を観て、帰りの車中吟との由だが、それに発して止（とど）まらない、旅は湯処、秋の頃。別に「バ

トンつなぎ声援湧くよ運動会」、「湧くよ」は要らない、例えば～「つなぐたびに声援」～だろうか。

落鮎やロマンスカーが橋渡る　　高志

「ロマンスカー」は、もともとハネムーン列車、尤も、この頃はフルムーン特別仕立てもあるかも。橋は彼岸との境にかけ渡す、いや彼岸は異郷、桃源郷もある。瀬を下る鮎の頭上をロマンスカーが車輪の音立てて、いえ滑らかに走り去る。いえいえ、落鮎は落鮎、人は列車の上。片方かたえ、夕焼け空に富士山がいずまいを正す。ア音九連の轟きが上を行く車輪音にもかない、けれんなく快適である。このうえ余談は慎むべし、ロマンの夢を毀す。

（出句一覧掲載順）

ハガキ句（55報）管見〉　　飯田孝三

廃屋の壁の花なる烏瓜　　高志

「壁の花なる」が抜。廃屋の形、周囲の情景までが彷彿する。結「烏瓜」は、臨場の思いを象徴して、深い。

白南風や海へ黙礼耀終はる　　羊三

魚市場の耀風景である。猛き漁者が海へ敬虔な感謝を捧げて終る。「白南風や」で決まる。その季感がその場の情景、漁者の心情と通い合う。“さあ梅雨明けだー大漁が続きますように”

ハガキ句55報（'10／7／19）

白南風や海へ黙礼耀終はる　　羊三
やすむ間もなく足長蜂の足ぢから　　道
山吹を塀にめぐらし瀞の茶屋　　かづひろ
七月六、七日南アルプス呂早川町六句
泡ふくれ森青蛙蝌蚪生る　　用平
日射したる女滝の裾に虹立てり　　敏子
戸袋に殻を脱ぐ蝉講者宿　　宏之助
廃屋の壁の花なる烏瓜　　高志
青山中廃家朽つまま毀つまま　　ひろし
尻に敷く雲の入道露天風呂　　三郎

戸袋に殻を脱ぐ蝉講者宿　　宏之助

戸袋に縋る蝉の殻が目に浮ぶ。木々に深く囲まれた講者宿の佇まいも。子供の頃、田舎の実家周辺で見かけた光景が懐かしく思い出される。「脱ぐ」は、脱ぐ「行為」ではなく、脱いだあとの「状態」だろう。何か深遠なものを感じさせる。

尻に敷く雲の入道露天風呂　　三郎

露天風呂の湯浴み風景である。臨場感が溢れ、「尻に

敷く」悠然の諧謔が面白い。積乱雲を見下ろす。

日射したる女滝の裾に虹立てり　　敏子

清らか、かつは艶。「立てり」は、虹が眼前滝の宙を統べる光景である。ただ、上五に推敲が要るのではないか。（「日射ざし」は、日ざ（差、指）しの強さが際だつ。その一瞬の虹の光彩に瞠のだろうか。また、「～たる～～てり」はどうだろう？「たる」が出ばり、虹の印象を殺ぎはしないか。重い気がする。）

青山中廃家朽つまま毀つまま　　ひろし

緑樹の茂る中に、民家が朽ち、壊れるままに放置される。「朽つまま毀つまま」は、そのさまを一々ありありと目に見せる。ただ「廃」屋と「朽」、「毀」がシノニムが少し気になる。（なお、「朽つまま毀つまま」が？）

泡ふくれ森青蛙蝌蚪生まる　　用平

泡には蝌蚪の卵が犇く、そして蝌蚪が生まれ、水面に落ちて泳ぎだす。そのさまが見えるようだ。泡「ふくれ」がめでたく、面白い。色彩豊かな光景だ。

やすむ間もなく足長蜂の足ぢから　　道

足長蜂の飛びざまが目交だ。「足ぢから」で結ぶ、詠み下し（一句一章）、加えて、「休む～」、「＝ぢから」のかな書きの手柄である。長い脚が一本一本見えてくる。「足ぢから」が心憎い。

山吹を塀にめぐらし瀞の茶屋　　かづひろ

「めぐらし」の力まぬ描写が茶屋の佇まいをありありと彷彿させる。「瀞」が利く。清涼の気が伝わる。

この駄文をまとめている途中、貴稿『南アルプス邑早川町吟行録』を拝受しました。本稿を中断したりして脱稿が遅れましたので、右『吟行録』の読後感想と一緒に送信します。（駄句近作）

スカイツリーゆらぐ水隈水馬
朝顔や釣瓶車のこけしまんま

（平22・07・28）

久保内美清流兄を偲ぶ　　飯田孝三

久保内美清流兄が逝ってしまった。五十五年に及ぶ交遊で、公私に随分お世話になり、俳句では、いろいろ学ばせて貰った。残念である。いつもの穏やかな笑顔が目に浮ぶ。

平成二十七年五月十八日永眠。信州松本出身、享年八十二歳。

永別

うへを向いて泪怺へる夏の鴨

追悼二句

葉桜の騒ぐにまかせ信濃入る
その声のどこまで行けば麦の禾

（兄に「麦の禾扱きはらから遠くせり」）

故美清流兄二十句

初富士や町の外れへ歩をのばす

どの家にも東のありてお元日
野良猫に日和のありて三ケ日
女正月立ち居の妻と二人なる
傘を張る糊目たしかに春隣
うららかやどこへ出かけしホームレス
街眠る夜も湧きやまぬ樟若葉
バグパイプ街に鳴らして五月くる
街は初夏見えぬ壁圧すパントマイム
祭笠外して母の顔となる
二歳馬と少年夏を惜しみけり
声高に茶髪屯す夏行く日
鈴虫の向きをかへたるらしき声
台風の目の中にをり鉦叩
敬老の日の母髪を薄く染め
金木犀思ひ出でざる何ならん
蛇穴に入る落日は常のごと
父の顔にさほど似てこず木の葉髪
空にあれば灰色の雪降り急ぐ
寒に入る空に潜みて葡萄の蔓

（平成27・09・06）

美清流さんのこと

光成高志

山若葉こちら見をりし鹿消ゆる
石蕗の花うすき日差しを際やかに
深き田の慈姑贏ち得し空のいろ
乳搾る牛の目に菜の花明り
花冷やしずかに睡る醪酒
祭笠外して母の顔となる
女正月立ち居の妻と二人なる
秋暑し飯を押しこむ口の中
猪斃る深手の犬の傍らに
忘れられ書棚の隅の木の実独楽
遥かまで植田のなかに孤々の家
恋をせしきのふは忘れ家の猫
薄氷の漂ひ水となりて止む
わが窓を秋ゆく月の移り去る
エックス線美貌に撮れて竜の髯
寒晴や脚細き犬ともなへる

（平成二十年六月二十～二十一日箱根吟行）

ペガサス駆く山霧湧けば霧を抜け

美清流さんのことは飯田孝三さんとの出会いから書かねばならない。平成九年春にK君が「飯田顧問も俳句をなされますよ」と伝えたので、早速、机を訪ねたのだが、不在であられたので、その日は会えず、十日後の四月十五日に昼食を共にしながら初対面の対話が出来た。それから半年近く後の八月末に句会をしよう

との提案で、九月三日に「八丁堀句会」を立ち上げた。その時、初めて美清流さんにお会いした。隔月の夜の句会であっていつも時間一杯一杯の選句選評であった。それを句会報に纏められて郵送されたのが美清流さんであった。綺麗な教科書体の字で編集された会報であった。夜の句会だったこともあり、懇談をする時間はなかったので、純粋に俳友であった。最初は六人であったが、陽也さんの同僚の万世遊（かづひろ）さんや、敏子（みち）さんなどの参加があって十人を越す時もあった。会報作成も大変であったと思われます。皆さんの事情があり平成十六年一月に「八丁堀句会合同句集」を発行してその歳の彼岸の句会を以って閉会となった。それでも美清流さんとの俳縁はハガキ句報で続いていた。孝三さんのおはからいで平成二十年の箱根一泊吟行会にご一緒できた。「二夫婦（めおと）尉二頭（あたま）嶺青し」（孝三）の通り、陽一さん、悦子さんご夫妻と私らの六人の吟行であった。これも時間に追われどんどん進めざるを得なかったが、今思うともっとゆったりすればよかったのにと悔やまれます。「高志さんのスピードにあてられちゃった」と別れ際に言われました。又その時の写真をお送りしたことへの礼状に、自分がこんなに年取ったとは思わなかったとありました。ハガキ句報67報に載せた美清流さんの今年の賀状の句を左に記しまして美清流さんのご冥福をお祈り致します。

初富士や町の外れへ歩を伸ばす　　美清流

（平成27・10・11）

お便り広場（到着順、敬称略）

白金葭九月号拝受致しました。とにかく圧倒されています。益々のご発展を祈ります。費用の件、今年は多額の納税をしましたのでご安心下さい。一度お会いできますなら、ご夫妻と孝三先生の他数人と梅の花でもお会いできませんか？俳句の話も聞かせて下さい。奥様を呉々も御大切にして下さい。（9・27　小山陽也）

拝復「白金葭」第55号を拝受。ご令室様ご退院とかお慶び申上げます二〇〇〇〇〜三〇〇〇〇句と多作で小林一茶に対抗するのも一つの楽しみかと存じます。一年一〇〇〇句で十年で一〇〇〇〇句。数から質への転換もあるのでしょうか。無知無教養はそのままでいい、凡人の心の中を十七文字で表現して読者とも楽しみを与えて頂きたく存じます。奥方様共々のご健康を祈り上げます。草々　　（9・28河村博巨）

秋らしくなりましたが、天候とか気象とか良いかと思うと大荒れとか、すんなり行かないものですね。九月号「白金葭」はまだ青々とした葉なのに、何やら落ち着いた風格が出てきたように思います。私の共鳴句。

秋夕焼どこへも行かず誰も来ず　　多美子

ここに電話も鳴らずを足せば或る日の私の一日です。出かける事は用事がらみ、自分で一人吟行で行きたい所

へも行けなくなり視野が狭くなり、想像力欠如、句を作れば駄句ばかり。留守番が猫では、どうにもならず鍵を持って出る生活にやゝ馴れて来ましたが、余生とは？と思いつゝの日々です。御誌の魅力ある証拠がお便りの多さと思います。一つの読物として成立している感じです。

（二〇一五・一〇・一　璃子）

拝啓　白金葭九月号ありがとう。何か読めない字が多すぎる。その後敏子さんの調子はいかがですか。あまり一生懸命にならずにちょっと心にゆとりをもってゆっくりすれば良いのではないかと思います。高志も白金葭編集発行などこれだけのことするのは大変と思います。頭を使うことは良いことだが少し心にゆとりを持ってゆっくり暮らして下さい。私は大丈夫です。十二月中頃二泊三日の予定でステントがどうなっているか検査することにしています。自分では何も感じないので大丈夫と思っています。今年も早十月に入りました。月日の過ぎ行くのが早く感じます。今年も稲刈の時期です。昔流でぼちぐやっています。そろく限界かなと思い乍なかなか止めることができずにいます。まああまり先の先まで考えずに今日が良ければそれで良しと思って暮らしています。九月の連休に娘や孫や曾孫達が誕生日を祝ってくれたことは嬉しかったです。孫が五人いるが、最後の孫が結婚して広島へ行きました。智恵子もさみしくなっただろうと思っています。私事ですが、八月のゴルフ大会（80名）で優勝してトロフィーをもらいました。（持廻）皆さんに顔をおぼえてもらって良かったです。

（後略）

ホールインワン膝の痛さを忘れ走す　　健三

（平成27・10・1　槙田健三）

御葉書二枚頂きました。一一月4日は欠席させて下さい。会費二千＋α同封します。古代は別便です。二十八日梅の花17:00より予約しました。四日梅の花でくじ引きがあり、予定価格以上の価格の籤が6枚当りました。（中略）奥様を大切にして下さいよ。

（10・7小山陽也）

“作品集”では大変お世話になります。申し訳ありません。“恋のうたを読む”の補充部分は本文校正が済み次第一緒にお送りします。放哉の鑑賞文の扱いはお任せします。みちさんお元気なご様子で安心しました。

（十月十八日　武者昭七）

（お礼）先日の例会ではお世話になりました。お礼申しあげます。皆、年なり以上に元気で、嬉しく、楽しいひと時でした。五周年記念特集のことでは、ご夫妻にまたまた大変なご苦労をおかけしますが、お体を厭いながら、よろしくお願いいたします。駄文「一句鑑賞」をお送りします。これまた、よろしくお願いいたします。随

分、日が詰まりました、朝夕も冷えます。なにとぞ御身お大切に、ご健吟下さい。

（平成27・10・19飯田孝三）

受贈誌（H27年10月号）

櫨紅葉信濃は空の深くして（彩125号）　平野ひろし
稲孕む葉先に露の煌きて　（〃）　〃
猫の恋小舞透きたる古土蔵　（〃）　平山三郎
梅雨湿り父の形見の長火鉢　（〃）　上田とし枝
蓮広葉露は勾玉形して　（〃）　大芝孝子
さぼうカレー匂ふ梅雨入りの神保町（飛行雲76号）　駿河岳水
勝鬨橋の碑文に見入る昭和の日　（〃）　安田雅明
雛飾ることもなくなり一人住み　（〃）　高山和子
槖駝師の一門の長鬼灯市（あすか10月号）　山尾かづひろ
田を囲む赤き直線曼珠沙華（東京クラブ10月）　輝子
虫ひとつ菊の花芯を出つ入りつ　（〃）　璃子
こぼれ萩雨の参道流れけり　（〃）　守啓
ビル街の空地に風の猫じゃらし　（〃）　文男

こだま

夏雲雀月山八合目晴れて（彩125号）　光成高志
軒先の風鐸夏の雲の中（彩125号）　〃
鹿島ならで大利根原の月見かな（俳枕248）　〃
名月ややに背ナ屈む観世音（〃）　飯田孝三

恋の歌を読む　その七　武者昭七

砂山の砂に腹這ひ
初恋の
いたみを遠く思ひ出づる日　石川啄木（「握の砂」）

透明で流麗なリズムとにじみ出る哀感とが失われた青春の日への郷愁を誘う。

啄木に「初恋の痛み」を与えてたひとがどんな女性であるかを詮索することはおろかなことである。それは僕らの大抵がこころの奥に秘めてある痛みであり、このうたはそれぞれの秘められたおもいを誘い出し僕らを遠くに誘うだけで十分だからである。

「スナ山のスナ」に始まり「腹バヒハツコイ」の「オモヒ」を「オモひ出づるヒ」と繰り返される押韻が効果をあげ、「遠くおもひ出る日」という静かな体言止めが初恋の日の遠さと悲しみをつたえてくる。青春のかたみのうたである。

子を負ひて
雪の吹き入る停車場に
われ見送りし妻の眉かな

明治四十一年の暮小樽日報新聞を去って啄木は翌年釧路新聞に新たな職を求めて単身赴任する。「小樽を離

れたくない。家庭を離れたくないからだ、という（「啄木日記」）にとってそれは何よりも切ないことであった。妻の節子は三歳の娘を背負って小樽の駅に夫を見送ったという。妻の目に見入る啄木の目には慙愧の涙が光っていたことだろう。

芭蕉の軽み以後（43）　光成高志

延宝五年頃、小沢卜尺の貸家に居を定め、妻の寿貞、甥の桃印と暮らしていた。そして、卜尺の斡旋により副業として神田上水の浚渫作業を請け負って書記役を勤めた。これは四年間に及び、延宝八年の深川移住まで続いた。延宝五年の冬に、新徳を京から迎えて、信章と三吟百韻をなし、「俳諧江戸三吟」と題す。江戸三吟からの発句

あら何ともなや昨日は過ぎて河豚汁　桃青

謡曲の『芦刈』の「あら何ともなや候。・・昨日と過ぎ今日と暮れ」や『船辨慶』の「頼みても頼みなきは人の心なり、あら何ともなや候」をふまえ、河豚を食った時の人情の機微を、ああ、何事もなくてよかった、昨日、河豚の味噌汁を食って毒に当らぬかと一晩中心配したが、とおもしろおかしく詠んだもの。何ともなやは謡曲では「困ったことだ」の意味だが、「無事」の意にもじっている。現代語では、なんともなかったと言う意味に既に使われているものだ。延宝六年が明けると

庭訓の往来誰が文庫より今朝の春　桃青

甲比丹もつくばはせけり君が春　〃

の正月の句が残されている。寺子屋の子供たちが習う庭訓往来の賀状例文は謂わば、新春が手箱（文庫）の中から出てくるようなものだといって町民の正月をめでている。遠い異国の使者甲比丹まで、へへえと這いつくばわせる将軍さまのご威光あまねきめでたい春であることよと江戸の正月を愛でている。桃青も無意識の内に日本を意識したのではなかろうか。鎖国が国法であったにもかかわらず、時代と国を思うのは知識人の普通の感覚である。それから百年足らず後世の与謝蕪村に「稲づまや波もてゆへる秋つしま」という句があり、これが単なる俯瞰の句にあらずして、日本列島を想像した句でもある。明治維新の丁度百年前、杉田玄白らの解体新書に取り掛かる三年前のことであった。

実げにや月間口千金の通り町　桃青

この通り町は間口一間値千金の繁盛ぶりだが、月もそれにふさわしく、実に一刻千金の眺めだというのである。これは通り町に近い鍛冶橋の俳人二葉子亭で巻いた歌仙の挨拶句。謡曲『田村』の「春宵一刻値千金、花に清香、月に影、げに千金に替へじ」をもじった。間口千金は間口一間につき千両もする繁盛の地。当時の商業地の

地価は間口一間いくらで表した。通り町は日本橋を中心に南北に通ずる江戸一番の繁華街。

この歳の春、新徳・信章・桃青の『俳諧江戸三吟』を刊行、これに信章との『江戸両吟集』を合わせて『桃青三百韻』を出版した。

詩

ぼくと彼

山岡草太

ぼくは走る　大雨の日に
もっているかさが　意味ないくらいに
ひみつの場所には　なぜか
ぬれていない　彼がいた
彼に　どうしてぬれていないの
とたずねた　彼は
うふうふと　笑うだけだった

（作者は11歳、山岡広幸、成田ちる夫妻のご子息。）

我孫子日記

	9/18	例会
＊	9/19	運動会
＊2	9/20	川越散歩＆ピアノ
＊3	9/21	イラガ禍
＊4	9/27	金子兜太講演会
	9/29	再診付添
＊5	10/7	酒匂川
＊6	10/8	湯河原
	10/16	例会

＊徒競走昼まで続く運動会　　高志

＊2 鳩鳴くや日枝神社にも曼珠沙華　〃
　ななに見るあこの面影秋たかし　〃
＊3 いたいた虫わが手を腫らすグローブに　〃
＊4 宣長に呵刈葭（かがいか）ありて天高し　〃
＊5 落鮎や山より下り橋潜り　〃
＊6 磊々と渓流ゆくや薄紅葉　〃

編集後記

陽一さんの鑑賞文は次回にして、ここで56号を閉じることゝした。来週は上野にて俳句懇談会、来々週は東京吟行句会の予定。みちさんも出られる。人間じっとしていてはおとろえる。回遊魚みたいなものか。

白金葭　第56号　平成27年10月発行
編集・発行人　光成高志（TEL & Fax 04-7187-1068）
発行所〒270-1119 我孫子市南新木2-14-17
表紙の題字：加納綾女。写真10月23日の白金葭